

「使える英語」への実践例

川 村 欣 司*

An Approach to "Usable English"

Kinji KAWAMURA

The purpose of this paper is to try to demonstrate some practical ways to improve the English ability of university level students, in particular their spoken English ability. The students in general have not been trained to express themselves in English, so naturally they have no idea how to do this. It is true that the students have many kinds of problems in English, but to make the students have a certain level of spoken English is, I believe, an important asset in this "international" world.

1.はじめに

昔ながらの経営の「書店」は今日、若者を中心とする「活字離れ」の影響で経営危機に瀕しているが、マンガを中心に若者が望むような本を揃えている “コンビニエンスストア” などではよく売れているらしい。母国語に対してこのような傾向がある時代に、外国語である英語を学習するにあたって「もっと英語を読みなさい。何度も繰り返し読みなさい。」とばかり言い続けるのは、はたしてどんな効果的が期待できるのであろうか。しかし多くの学習者、特に中・高校生にとっては、普段の試験では読み・書きの能力が試され、高校・大学入試でも同様であるために、「活字」中心の英語学習をせざるをえない状況は、昔からほとんど変わっていない。「現在、日本人にとっての英語学習は、学習というよりは、大人の日本人になるための修行のひとつのようになっている。」¹とあるように、英語学習は苦業なのである。

「英語」という科目ばかり機会ある毎に批判されるのはなぜだろうか。「何年も英語を勉強しているのに簡単な挨拶もろくにできない。」とか、「巨泉の使えない英語」²というテレビ番組などで日本人の英語力が批判されている。しかし「英語」だけが期待されるように習得されていない唯一の科目であろうか。多くの中学生、高校生にとって「英語」は、他の科目と同様、ひとつの科目にすぎないのである。表面上は英語塾や予備校が繁盛し、学校以外でも一生懸命に勉強しているように見えるが、高校進学や大学進学のためにせざるを得ないからであり、こととしての英語学習に興味・意欲を持っている学習者はどれだけいるだろうか。他方、英語学習の動機の大半が受験のため、進学のため、就職のためであることが英語学習の成否に悪影響を与えているという意見をよく耳にするが、受験に「英語」がなければ、どれだけの高校生が英語を今と同

* 教養部

じように勉強するだろうか。

日本人の英会話がだめなのは大学入試に英語があるからという意見もある。「高校、大学の入試に会話がでない以上、それをやる必要はない。したがって、受験英語に強くなるということは会話ができなくなることを意味する。」³と、平泉氏は述べているが、入試から英語が外されたとしても、それほど現状と変わらないように思う。それよりもむしろ、日本人の英語力は今よりも低下するのではないだろうか。

日本人にとってはいまでも英語は外国語にすぎないという事実はしっかり認識したい。ほとんどの学生にとって、英語を実際に使う機会はない。しかし、将来は「英会話」ぐらいできなければと漠然と考えてはいるが、具体的な勉強は今特にしていない。極端な話だが、卒業単位に英語が必要なければ、おそらくほとんど学生は英語を取らないのではなかろうか。

そんな学生に何をすればよいのか、何をしなければならないのかと今も悩み続けているが、少しずつ実践していることを述べさせていただく。

2 日本人の英語力

私たち日本人の英語学習熱は相当なものであるが、そのレベルはどの程度のものであろうか。勿論、色々なレベルの学習者がいる。下手な人、少しはできる人、かなりできる人、・・・など様々なレベルの学習者がいる。しかし、「日本人の得点は世界106ヶ国中では85位」⁴と知られると「日本人の英語力は相当低い」と解釈せざるを得ないだろう。この85位という数字はTOEFLの得点をもとにしているのだが、TOEFLを受験するのはアメリカの大学への留学を考えている人がほとんどである。そういう人達の平均が85位であるから、もっと広義での日本人の英語力となれば、ほとんど「絶望的」でないだろうか。

「うまくならない原因で一番大きいものは、日本語でほとんど何でも用が足りてしまう環境の中で、なにがなんでも英語を学ばねば、という気持ちにならないことであろう。・・・せっかく学ぼうとした以上は、通用するところまで学びたい。そこでの問題は、日本人は英語がへただ、と自ら決めてしまっていることである。これは実は、事実誤認なのである。」⁵つまり、英語を「使う」環境を作る以外にうまくなる方法は無い、ということである。平泉氏は、「英語を中学、高校の教科の中で、ひろくとりあげるということは、大変よいことである。望ましいことである。」と言いながらも、「英語を単に形だけ「習っている」というようなことで、その実行の困難さというものを見つめなければ、それは現実の逃避にすぎない。」⁶と述べている。「習う」だけではいつまでたっても英語力はつかないわけである。ましてや、いいかげんな気持ちで学習し続けるだけでは、英語力は全くつかない。

3 「使える英語」にするには

「英語の授業」という言葉から、どのような活動が想像されますか。教師が日本人の場合、教師も学生も日本人ということで、英語の日本語訳をつけ日本語で意味がだいたい理解できればいい

だろう、と教師は考え、また学生はそうすることが英語学習であると信じ込んでいる場合が多いのではなかろうか。そんな授業ばかり繰り返しても、「使える英語」を身につけることはほとんど不可能に近いことは、教師も生徒も重々承知しているのに、である。このいう状態のままではいけないと痛感し、少しずつではあるが「使える英語」を目標に “役立つための訓練” を授業に導入している。

一般的に言われる「英会話力」というものを「英語運用力」と解釈するならば、その運用力を身につけるにはどうすればよいのだろうか。理論や理屈ばかりでは英語の運用力は身につかないだろう。実際に英語を使わなければ、使えるようにはならないのである。

英語の基礎力は、「将来、発展性のある核になる英語運用能力、即ち、基本的な英語の文法と語彙を用いて、英語でコミュニケーションを行なう能力」であり、限られた能力であっても、必要に応じて、それを積極的に活用して、意思疎通を図ろうとする態度を育てることも基礎力のなかに含まれよう。「国際化社会」といわれる今日一番必要とされているのは、このような基礎力であろう。

4 4コマの絵を用いての授業

4.1導入の動機

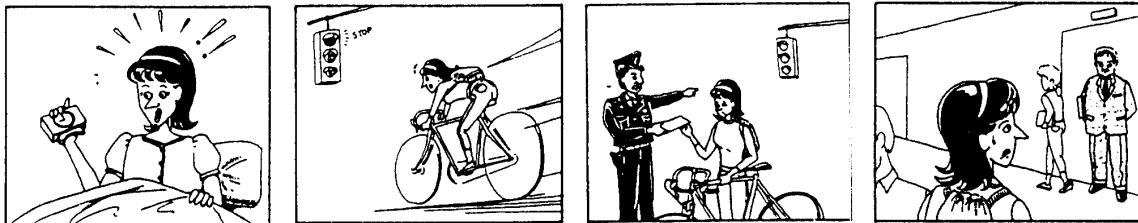
「さあ、なんでもいいから英語で話をしましょう。」といわれて、しゃべりだす人は普通いないであろう。伝えたい事・物があり、そして相手がいるから、人は話をするのである。何かいい題材はないものかと探している時、英検の準一級の二次試験では、4コマの絵を英語でナレーション（物語ること）をしなければならない事を知り、これをヒントに似たような活動を授業に導入してみようと考えたのである。

4.2実践例

例えば、次のような絵⁹を見せて、英語の指示に従ってまず各自のノートに書くように指示する。その際、それぞれの絵で一番言いたい事、表現したい事を書くように注意している。問題とする絵の内容にもよるが5分位与えてから発表してもらう。その発表例を順に見て行きたい。

■ Make up a story by looking at the four pictures below.

(Begin your story with "Diana sat up till very late studying for a final examination.")



(学生⁹1) 1. When she woke up, she found it was nine o'clock and astonished.

2. Then she hurried to go to school by bicycle and she ignored that the traffic

light signed "Stop."

3. Soon a policeman caught her and told her to come to his office.

4. Finally she reached school, but the examination had already been over.

(学生2) 1. When she got up in the next morning, she was surprized to see the the alarm clock. It was nine o'clock. She thought she would be late for the test.

2. But she changed her clothes in a hurry, and she rode her bicycle. On her way to school, she saw the light turned red. But she went against the light.

3. Unfortunately the police officer saw her going against the light, so she had to stop.

4. When she arrived at the school, it was too late. The final examination had already begun, and in front of the room a teacher stood not to enter the student. Diana was very shocked.

(教授用資料) 1. She was very surprised to find that she had overslept.

2. She hurried to school on her bicycle and went through a red light.

3. A policeman saw her and gave her a ticket for violating a traffic rule.

4. She arrived at class just as the students were leaving. The professor looked irritated.

上記の学生の英文は、単語、文法、構文などで誤りがあるが、原文のままである。下線は著者が誤りと思われる所に後でつけたものだが、実際の授業では、口頭発表のため、ほとんど訂正していない。(ノートに書かせずに直接口頭発表できることが理想だが、当面この方法を取っている。) 下線の部分は次のように表現されるべきであろう。

astonished → この文全体で She was astonished to find it was nine o'clock.

that the traffic light signed "Stop." → the red light

caught → stopped

had already been over → was already over.

surprized to see the alarm clock → surprised to see the alarm clock showing 9 o'clock

rode → rode on

turned → turning

so she had to stop. → so she was told to stop.

stood → was standing

enter the student → let any student in

上記の例からでも分かるように、その誤りは多種多様である。しかし、わたしは学生が間違っ

も出来るだけ訂正しないようにしている。その理由は、表現しようとする姿勢の方が、文法ばかり意識しすぎて何も話せない状態よりもずっと価値があると信じるからである。指導する私自身日本人、完ぺきな英語力を持っているわけでもない。ただし、あまりにも「通じないだろうな」と感じた時のみ、「言いたいのはこんな事では・・・」と提示する程度にとどめている。

オーラル・コミュニケーションを展開するに当たって、必要不可欠なものは、学習者の興味・関心をそそる話題（題材）である。¹⁰ 学習者にとって身近な話題を色々取り上げるよう心がけているが、学生にとっては身近なことを英語で表現することは、大変難しいようである。

その原因は次のように分類できる。

- 1 表現したい適切な単語を知らない
- 2 どの構文を使うべきかわからない
- 3 動詞の使い方が不適切
- 4 何を表現すべきか焦点が定まらない

同じ絵を見せてもその解釈は様々である。その解釈自体は訂正できない場合が多いが、その言語表現は適切でないが表現しようとする意図が分かった場合は、「こう言うのはどうだろう」と提示してみたり、よりよい表現がないかどうかみんなで検討するように心がけている。

5 むすび

発表能力を育てることは、語学学習のなかで一番大切だと信じる。このことは何も英語だけに限らず日本語にも当てはまると信じる。何年学習してもその能力が付かないのはどこかにその欠陥があるように思える。現時点での英語力ではまだまだ不十分ではあるが、何とか表現しようとする、特に自分の言いたいことを言う、という姿勢をいつも持たせたい。また、何か表現したいという気持ちにさせる環境を教師・学生が共同で作らなければ、いつまでたっても英語は使えないだろう。

「教師が変われば生徒が変わる。自分が変わる努力をしないで生徒に責任を転嫁するのはやめたい。」¹¹ 英語を指導する教師は自らも学習者であることをいつも自覚し、よりよい学習環境を生徒と共に作り上げたい。

注

1. 渡辺武達、『ジャパリィシュのすすめ』、朝日新聞社、東京、1983、p.109.
2. 関西では平成四年十月よりABCテレビ（朝日）で毎日曜日の夜（7時）に放送中
3. 平泉渉、渡部昇一、『英語教育大論争』、文藝春秋、東京、1975、p.63-64.
4. 竹蓋幸生、『日本人英語の科学——その現状と明日への展望』、研究社、東京、1990、p.10.
5. 渡辺武達、『ジャパリィシュのすすめ』、朝日新聞社、東京、1983、p.134.
6. 平泉渉、渡部昇一、『英語教育大論争』、文藝春秋、東京、1975、p.130.

7. 米山朝二、「コミュニケーション活動と英語の基礎力」、『現代英語教育』、1992,6月、p.19.
8. Ted L. Miller他、『English for Self-Expression』、北星堂、1991、p.77.
9. 著者が非常勤で教えている英語専攻の2回生
10. 飯田毅、「身近な話題（題材）とオーラル・コミュニケーション」、『現代英語教育』、1992, 3月、p.14.
11. 高塚成信、「学習意欲を引き出す指導力とは」、『英語教育』、Nov.1992 Vol.41 No.9、p.17.、

参考文献

- 太田朗、『英語学と英語教育をめぐる』、英語教育協議会（ELEC）、東京、1977.
- 小池直己、『英語教育の実践研究』、南雲堂、東京、1988.
- 小寺茂明、『英語指導と文法研究』、大修館、東京、1990.
- 最所フミ、『英語の習得法』、研究社、東京、1982.
- 柴田徹士、他『英語再入門——読む・書く・聞く・話す』、南雲堂、東京、1985.
- 多賀敏行、『文化としての英語』、丸善ライブラリー、東京、1992.
- 高橋潔、『現代英語事情 【グローバル時代のことば学】』、ジャパントイズム、1992.
- 高橋正夫、『身近な話題を英語で表現する指導』、大修館、東京、1991.
- 高橋正夫、他『英語教師の発想転換——授業の活性化のために』、三省堂、東京、1989.
- 田中春美、他『言語習得と英語教育』、英語教育協議会（ELEC）、東京、1987.
- 橋本満弘、『英語コミュニケーション論——実践力養成に向けて——』、学書房、東京、1988.

(平成4年12月16日受理)